

ONE LOVE

通信

49号

2013年5月19日発行

冬と春を日本で過ごした。今年の桜は結構長い間咲いていた。関東と関西を何度が往復して、新幹線から富士山もたくさん見た。更にルワンダから日本に戻る飛行機の上からも、富士山がとてもよく見えた。いつもは横から眺めている富士山を、てっぺんから眺めるというのも不思議な感じ。

しかしいつも思うのだが、富士山や桜を見ると、なんだか得した気分になる私は、やっぱり日本人なのだなあ…。



【お父さんからの贈り物】

今年も無事に日本滞在を終えました。お世話になった皆さま、どうもありがとうございました。

去年10月末の洪水で被害を受けたワンラブ。被害の大きかったレストランとゲストハウスを必死に修復工事しているものの、限られた予算の中、資金繰りが難しく、ガテラも私も疲労困憊。疲れ切っているから会話もはずまない。目を合わせても、出るのはため息ばかり。

そんな中、嬉しいお知らせが降ってきました。

ある日いつものようにルワンダでメールチェックをしていると、一通のメール。件名に賞を受賞したと書いてある。しかし怪しいメールも多い昨今。果たしてこのメールを開くとウィルスに感染するとか、何か大切な情報を盗まれてしまうのではないかと…？以前何も知らずに開いたメールで痛い目にあったことがあるので、この頃は怪しいメールに神経質になっているのである。開くのをやめようか。しかし賞ってなんだ？もしかしたら何かの賞をもらったのか？賞と言うことはご褒美もあるのか？う～む、開くべきか、開かざるべきか、悩むこと数十分。危ないかなと思いつつ、甘い言葉に誘われてメールを開いてみると…。

おお！何と！時計のシチズンホールディングスが毎年行っている「シチズン・オブ・ザ・イヤー」という賞に入賞しましたというお知らせではないか！しかし内容を読んでも、まだ半信半疑なので（もしかしたら誰かが私をぬか喜びさせようと、嘘のメールを送ったとか）、シチズンのHPをのぞいてみると、この賞は1990年にスタートし、毎年市民社会の発展や幸せ・魅力作りに貢献した3人の市民を選ぶらしい。素晴らしい賞ではないか！しかし私たちがこんな賞をもらって良いのだろうか？いや、でもうれしいなあなどと思いながら、担当者にメールを返す。するとすぐに電話が来た。話していると「今回の賞金のことですが…」と言うではないか！HPには賞金のことなどまったく書いていなかったから、賞状をもらえるだけと思っていたのだが、それを聞いて思わず「ばんざーい！」と電話口で叫んでしまった。レストランとゲストハウスの修理で思わぬ出費が続いていたので、とにかくお金がほしかったというのが本音である。そして1月末にある表彰式にぜひ出席してほしいとのこと。しかしまだ洪水で被害を受けた場所の修理が続いている。2月半ばに日本に帰る予定はしているものの、まだその時期にはなっていない。受賞は本当



にありがたいが、この状態のまま日本に行ってしまったら、自分たちの首を絞めてしまう…。

外で修理工事を進めているガテラの元に行き、賞をもらったこと、賞金がもらえること、表彰式に来てほしいということを伝える。でもこの状態で行ってしまうと、あとが大変だから、表彰式には代理に出てもらおうと思っているということも付け加えた。洪水になってから2カ月以上、修理工事やそのためのお金のやりくりで精魂詰めていたガテラを見ていただけに、日本帰国をぎりぎりまで伸ばし、出来るだけのことを進めておきたいというのが、私の本当の気持ちだった。しかしガテラはそれを聞き「行って来い」と言った。「せっかく自分たちのために賞を与えてくれて、その祝いの席に出席しないと失礼ではないか」と。「あとは俺が何とかする。どうせ近いうちに日本に行く予定だったのだから、先に行って、段取りを整えてから、俺を呼んでくれ」やっぱりそう来たか。この人はそういう人だ。一人残って大変なはずなのに、いつもそういう部分を自分で背負いたがる。

そしてありがたいことに、シチズンは日本までの航空券も負担してくれるという。そうか、それは本当に助かるな。それならばせっかくだからその厚意に甘えよう。帰国を早め、日本へ向かった。

表彰式の前日に到着。会場となるホテルに部屋も取ってくれたが、こんな素敵な部屋に泊まるのは初めてである。バスタブに入りながら、テレビも見られるのであるぞ。貧乏性の私は必要もないのに、何度もお風呂に入り、無理やり大して見たくもないテレビを眺めてしまった。置いてある備品もおしゃれである。

そして湯上りにメールチェックをした。ふかふかのベッドの上で、パソコンを開いたのだが、この時背中にいや～な痛み。嗚呼、腰痛の再発だ…。狭い飛行機で不自然な姿勢を取っていたから、ゆっくり背筋を伸ばせばよかったのに、せっかくのゴージャスなベッドだったから、それを満喫したく、机ではなくわざわざベッドでメールを開いたのが災いした…。うう、痛い…。

翌日の朝。昔からのワンラブの助っ人がホテルの部屋までやってくる。晴れの日の舞台で着る、私のための洋服と靴を持ってきてくれたのである。そうなのです。私はこの年になっても、よそ行きの服を持っていないため、急遽彼女に貸してもらったのです。う～む、赤い服か…。こんな色の服はこの数十年着ていない。恥ずかしいなあ…。

そして表彰式。今年一緒に受賞したのは、障害や病気で声を失った人のため、文字入力ソフトや音声再現ソフトを開発した吉村隆樹さん、ご本人は車いすに乗っていて、お母さまがその車いすを押している。そして2度のエベレスト女性最高齢登頂記録を達成した渡辺玉枝さん、つわものなのに非常にシンプルでかっこいい。

うわあ、いろんな人が集まっているな。緊張するな。シチズンホールディングスの社長さんの挨拶、選考委員のお話、表彰状の授与。晴れの舞台なのだが、昨夜痛めた腰が辛い。情けないことに腰に手を当て、顔をひきつらせながら賞状を受け取る。

この賞は私個人の名前で受賞したことになっているが、ここまで来るまでには、たくさんの人の支えがあった。だからこの賞はワンラブが受け取ったものである。

そして活動を続けていて感じる。それはこの活動を通して、大虐殺後のルワンダの歴史を共に創っているという実感。

大虐殺によって、ルワンダは多くの人やものを失った。立ち直るために、政府や国民が流した汗の量は計り知れない。そんなルワンダに入り込み、同じ時代を生き、一緒に国造りをしたこの活動。嫌なこともたくさんあったけど、ゼロの状態から共に国を作ってきたということが、私たちの誇りになっている。そんなことを挨拶として話した。

式の最後にみんなで写真を撮った。車いすの吉村さんを中心に渡辺さんと私、そしてシチズンホールディングスの社長さん、選考委員会の皆さん。吉村さんはちょっと手が不自由で、賞状を持つ手が震えている。両脇に座っていた渡辺さんと私で、横から吉村さんの賞状を支える。



おしゃれして記念撮影。前列、左から2番目が渡辺さん、吉村さん、私の順番。

いや、自分で言うのもなんだがこれは良い写真だ。みんな嬉しそうではないか。ああ、しかしこの場にガテラがいないことがひたすら残念である。喜んだらうなあ。私がこうしている今も、彼は必死に洪水被害の修復工事をしているのだ。私だけ晴れやかな場所にいてごめん。

今回のこの賞。実は私にはもう一つの思いがあった。

亡くなった父は、私が小学生の頃、時計や宝石を売るお店で、販売員として働いていた。何度かその姿を見に行ったことがある。でも父親が働いている姿は、家で見ていた父親と違っていたので、何だか妙に照れくさかった記憶がある。売られている時計の中には、シチズンの時計もあった。家にはシチズンの置時計もあったし、そのキャラクターである「シチズンCちゃん」の人形もあったような気がする。そして何より、誕生日のお祝いに、赤いバンドのシチズンの時計を父から貰った。その当時、小学生で腕時計など持っている人は少なく、お出かけの時はいつもその時計をはめていた。

そんな思い出があったから、今回の賞は父が運んでくれたような気がしてならない。

父は生前この活動の広報マンとして、実によく動き回ってくれていた。ワンラブ通信を自転車に乗せ、あちこちに配っていたのである。昇天してから、あの世から足もとの危ういワンラブを心配し続け、洪水の被害で落ち込んでいる私たちを見て、何とか気合を入れてやろうと思い、天国から自転車に乗って下界まで降り、シチズンにワンラブ通信を配りに行ったのではないかと。そして数多い候補者がいるにもかかわらず、きっと選考委員の人たちに、ワンラ

ブ通信を無理やり握らせたに違いあるまい。

相変わらずな父である。しかしお父さん、ありがとう。

この受賞をきっかけに、また気合を入れ直し、私たちを必要としている人たちがいる限り、がんばろうと改めて決意したのであります。

応援してくれたみんな、どうもありがとう。そしてシチズンホールディングスの皆さま、ありがとうございました。商品としていただいた腕時計、今ガテラの腕で光り輝いていますよ〜。

【ガテラも来日。しかし…】

そして表彰式から約3週間後、ガテラも日本に到着しました。その間、私は日本でワンラブのお話をさせてもらえるところを探し、スケジュール調整。あそこではこんな話をしよう、ここではルワンダの民芸品も売ってみようなど、準備をするのは楽しいのだ。

皮切りは高校。ここには高校時代の恩師と同級生が教師となって教えている。しかし自分が昔教わっていた先生の前で話をするというのは、照れくさいものですね。新任教師としてやってきたその先生に、多分私は反抗していた。若気の至りというやつです。そして今、その時気がつかなかった先生の魅力に、やっと気づくことができたのである。

それからワンラブの助っ人に紹介してもらった教会。この日はやたらと冷たい風が吹いていた。ちょっと古めかしい教会は、良い味を出している。集まった人たちはとても気さくで、終わってからいろいろ話しかけてくれた。

都内のアフリカンレストランでやった時は、予想以上の人が集まり、びっくりした。残念なことに、このレストランは2月いっぱい休業し、現在新たな作戦を練っているようである。

シェアハウスと言う場所も初めて利用させてもらった。昔の長屋のようなものですよと聞いていたので、くまさんはつつあんのようなレトロなものを想像していたが、とてもおしゃれな場所ではないか。ふ〜む、最近はこの場所が人気があるのか。

毎年訪れている京都の小学校、ここに来るとホッとします。今年は同じ敷地内にある幼稚園にも行き、ちっちゃな子供の歌を聞かせてもらった。幼稚園の机・いす・トイレは笑ってしまうくらい小さく、ガリバーになったような気がする。



幼稚園の子供たちとハイタッチするガテラ。

京都の報告会ではいつも力を貸してくれるYさんが、体調を崩しているにもかかわらず、仕切ってくれた。また彼の息子が良い青年なんだ。最近ちょっとお母さんの前でかっこつけているようではあるが、これも若気の至りというやつであろう。Yさんの周りに集まってくる人も、たまらなく気持ちの良い人ばかりである。

地元の小学校も訪れたが、後日私がショッピングセンター内でラーメンをすすっている時に、その小学校で話を聞いた女の子たちから「真美さんですか？ワー、チャー」と話しかけられてしまった。話しかけられることがわかっていれば、素ラーメンではなく、せめてチャーシューくらい入れておくのだった…。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【有意義に過ごすためには】

さあ、朝が来た。気を引き締めて今日も働きますか。いつものように装具を履いて、靴のひもを結ぶ。

そこへ真美。「ルワンダ人って、みんなそんなふうに靴のひもを結ぶの？」「俺はこうやって結ぶよ」どうやら私の靴ひもの結び方は、人と違っているようだ。「子供の頃から？」「子供の頃からって言ったって、俺が初めて靴を履いたのは8歳か9歳の頃だった」「ちなみに俺が初めて長いズボンを履いたのは17歳だった」

その年齢を聞いて驚く真美。そうなのである、当時のルワンダはまだかなりいろいろなものが、手に入りにくかったのである。

しかし服を着出した私は、突然おしゃれに目覚め、その頃流行っていたパンタロンや底の分厚いサボと呼ばれるサンダルを履き、頭はアフロというファッションだった。

当時私は障害者の施設で、電化製品を製作・修理する工房で働いていたのだが、その上司が実にかっこいいシャツと

ズボンに身に着けていたので、それを真似したのだ。

しかし、どうやら私の着ていた服は、彼の服よりもかっこよかったようで、みんなが私の服をほめ始めた。そして上司はちやほやされている私に嫉妬し、ああ、なんてこった。私をクビにしたのである。

なぜ人は嫉妬をするのだろうか？私はあなたがカッコいいから真似をしたのですよ。別にあなたを追い抜きたいと思って、おしゃれをしたのではないのだ。真似をされるということとは、自分が支持されているということで、喜ぶべきことではないですか。しかし悲しいかな、世の中心にあるのはこの「嫉妬」という感情であり、それ故、常に争いがある。この活動をしていって、嫉妬を感じるのである。

いいじゃないか、人は人、自分は自分。闘争心があるのは結構なことである。しかし争うべき相手は自分の中にいるのだ。人に嫉妬するなど、そんな時間があるのだったら、自分の心の弱さと戦った方が、そののち自分の力として蓄えることができるではないか。

だから私は嫉妬が嫌いである。

そんなことをしているうちに、約3週間が過ぎたのだが…。ルワンダで急用が発生したのである。何とか解決しようと、現地のスタッフに指示を出すのだが、埒が明かない。電話でのやり取りに限界を感じ、スタッフだけでは解決不可能と判断し、ああ…。ガテラは日本をあとにしたのでありました。たった3週間弱の滞在である。この数年、何故かガテラが日本に来ると、ルワンダで問題が勃発し、彼はスケジュールをこなすことなく、日本を離れなくてはならなくなる。やっと洪水修理工事から離れ、息を抜けたと思ったら、またルワンダにとんぼ返りだ。今年こそ温泉に行こうと思っていたのに…。

だからここから先は、私、真美一人の日本行脚である。寂しいのう…。しかし泣いてもいられない。

嬉しかったのは、ルワンダでボランティアをしてくれた青年のご両親が開いてくれた報告会だ。同じ地元と言うこともあり、今まで地元を開拓できなかった私としては非常にありがたかった。そしてこの号が出る頃に、その青年はルワンダから日本に戻ってくる。

また私がアフリカと関わり合うきっかけとなったケニアのスワヒリ語学校の先輩方を集めて話をした時は、結構緊張した。だってみんなアフリカ好きだから、下手なことを話すとぼろが出てしまいそうなのである。

ラジオ講座でも話をさせてもらった。しかしラジオで話すというのは、とても難しいよ。通常はスライドを見せながら話をするのだが、ラジオでは視覚に訴える表現が使えない。つまり「あれ」とか「これ」と説明することができないのだ。それを意識しすぎて、冷汗が流れっぱなしだった。だからうまく話すことができなかった。もしラジオで話すチャンスがあったら、もう一度挑戦したいものだ。



走るための義足を手にして嬉しそうなかテラ。隣の女性の義足です。彼女はパラリンピックの選手。

今回は大学で話をさせてもらう機会も多かった。アフリカを研究している先生たちに、話をさせてほしいと依頼すると、快く時間を作ってくれる。アフリカをフィールドにしている先生たちは、村や森に住みこんで研究している人もいて、苦労話や裏話が面白い。

また頼もしいのは、ルワンダに行ったことのある学生が、自ら講演会の手筈を整えてくれること。チラシ作り・広報・場所取りなど、こちらが希望を伝えただけで動いてくれる。

それから初めて訪れた大学で、聞きに来る学生が誰もいない！と言う状態が発覚した時、先生がグラウンドで運動をしている学生を無理やり連れてきて、参加させた。少人数の前で話をするのは、むしろ辛いものがあるのだけど、でもこの日はなんだか楽しかったなあ。無理やりにもかかわらず、学生が一生懸命聞いてくれたのです。よし、来年

はまたここでやってみよう！

義肢製作を教えている学校にも二つ行った。この学生の中から誰か、ルワンダに義足を作りに来てくれないかなあ。日本のように材料や工具が充分にあるわけではないけれど、彼らの柔らかい頭で、どんなふうに工夫できるか教えてください。あるご夫婦も参加。ご主人は義足を履いていて、この学校で学生たちが義足の型を取る時、モデルになっているそう。そして私の書いたブログのコピーを見せてくれた。それは2011年の震災の時に書いたもの。ルワンダの田舎で畑を耕している青年が、日本の人たちが辛い思いをしているので、被災者たちのために自分で育てたジャガイモをぜひプレゼントしたいという記事。そのご夫婦は被災され、その場所を離れ、現在関西で生活をしているらしい。そして私の書いたブログを見て「ルワンダからエールを送っている人がいる」と嬉しくなったらしい。そうか…、あのブログも無駄ではなかったのだ。嬉しいな。

そしていくつかの教会。私自身は無宗教だが、そんな私でも教会の人たちは、優しく受け入れてくれる。日曜日の気持ちの良いお天気の日、ワンラブの話に耳を傾けてくれるというのは、本当にありがたい。

あっという間に3カ月が過ぎてしまった。今年はガテラも張り切っていたのに、一緒に動き回ることができなくて残念。

でも今年もたくさんの出会いがありました。どの場所でも話をしても、緊張してしまうけれど、帰りの電車の中ではいつも心が温かい。

来てくれた皆さま、そしてボランティアでお手伝いをしてくれた皆さま、本当にありがとうございました。また来年、きっとガテラと一緒に再び会えますように。



今号の患者さん

去年の末、若い女性が義肢製作所にやってきた。彼女の手には、薄汚れた義手が握られている。

彼女は30手前のうら若き女性。しかし左の手が親指しかない。うつむいて話し、人の顔を見ようとしない。よく見ると、顔には古い傷があり、耳も半分しかない。

そう、彼女は1994年のルワンダ大虐殺の時、民兵に切り付けられ、体に傷を負ったのだ。

その頃彼女はまだ10歳前後。どんな思いで、その状況を受け入れたのだろうか？刃物を持った大人が迫ってくる、その恐怖を今も思い出すのだろうか？19年間、体と心に傷を持ちながら、どのように過ごしたのだろうか？

その彼女は自分と同じような目にあった友人が、シリコンで出来た義手を持っていたため、自分もそれと同じようなものがほしくなり、ワンラブにやってきたのである。

義肢装具士たちを集めて、その義手を観察する。私たちの技術では、それと同じ義手を作ることはできないけれど、

日本の技術ならきっと作れるはず。

そう思って、早速作ってくれるところを探した。その会社は京都にあった。もう 60 年も義手を作り続けているらしい。社長さんにアドバイスを伺いながら、彼女の型を取った。それを壊れないように包んで、日本に送った。ルワンダ人の肌の色を出してもらうために、私の手つまり日本人の色一と、彼女の手を並べて写真を撮る。これで色味がわかるかしら？

しばらくして出来上がったと連絡が来た。さて、どんなふうに出たのかな？楽しみである。

年を越してから、出来上がった義手をルワンダまで送ってもらった。彼女には取りに来るように連絡済みである。

きっと首を長くして待っていたのでしょうね。当日、朝早くからやってきた。

包みを開けてみる。彼女の表情はとても緊張している。回りの義肢装具士たちものぞき込む。

あら～、本物の手みたい。しわもあるし、爪の半月もある。何よりも驚いたのは、アフリカ人の手みたいだということだ。どういうことかと言うと、アフリカ人の手は、指の関節のところが微妙に色が濃い。全くそのまま再現されているのである。きっと、いろいろな写真を見たりして、研究したんだろうな～。

こわごわその手をはめてみる彼女。おお！ぴったり！いや～良く出来ているな～。みんながその出来に大喜び。義肢装具士は義手の手入れの方法を教えている。汚れはふき取って下さいねとか、油に注意して下さいねとか…。「爪が伸びるから、爪切りを忘れないようにね」と言う冗談もあり、みんなで一緒に笑った。



アシエールから手入れの仕方を教わる。左手に義手をはめているけど、全くわからないでしよ。

その手をはめて彼女が言ったのは「この爪にマニキュアを塗ってもいいの？」ということだった。ああ、きっと年頃になってから、ずっとそんなことをしてみたかったんだろうなあ。他の女性がマニキュアを塗っているように、自分も塗ってみたい。でも私には指がない…。そんなふうに感じていたのかもしれない。だから手ができた今、それをやってみたかったに違いない。

そこへガテラがやってきた。早速出来上がった義手を見せに行く彼女。そこで彼女が言った。「私もこれを作る勉強をしてみたい」

彼女ならとてもとても心をこめて、義手を作るんだろうな。その人がはめた時の気持ちを考えながら。

義手を作ってくれた佐藤技研の皆さま、どうもありがとうございました。この義手をはめることによって、彼女の辛い思い出が少しでも癒されますように。



お父さんに嬉しかったことを報告するように、ガテラに義手を見せに行く。いつも厳しい顔をしているガテラもニコニコ。

【日本で見かける嫌な光景】

日本に戻ってくると、しばしば？？？が頭の中を駆け巡る。その多くは「日本はこんなことで大丈夫なのか？」と言う思いだ。

相変わらず電車の中で化粧をする女性が多い。ガテラもそれを不思議なものを見るような目つきでじーっと見ている。

口紅をつけるだけと言うのであれば、まだ許そう。しかしファンデーションの下地から始まり、果ては眉毛を抜き始め、つけまつ毛をつけるに至っては、トイレの後、うっかりして、パンツにスカートが挟まったまま外に出てしまうということよりも恥ずかしい。つまり彼女らの行為は、アクシデントでは済まされないからだ。これは全く私の個人的な意見だが、例えどんなに彼女たちがきれいに仕上がったとしても、あれだけ他人の目を無視できる女性は嫌だなあ。だって人は他人の目を意識して初めて背筋が伸びるのではないだろうか。

そして一つ付け加えるとすれば、ほぼ全ての人が思っているように、彼女たちはそれだけみっともない真似をしても、大して美人には仕上がっていないということだ。

それはきっと、とても素晴らしく仕上がっていたとしても、その過程を最初から見せられ、その行為の上品さを感じてしまったから、素直にその出来上がりを認められないからかもしれない。

彼女たちの 9 割以上は強い意志を持って他人の目を無視し、自分の仕事をやり遂げてはいるが、吊革につかまって立っている身としては、たまらなく不快である。

そして彼女たちに投げかけるべき言葉は「馬鹿」以外の何ものでもない。

思うに日本人女性は、外にいるとき緊張感がなさすぎる。背筋も丸いし、足も引きずったように歩いている。だからとてもだらしない。その点ルワンダのおばちゃんたちは、カッコいいぞ。堂々としてて。

どうした日本人女性よ！自分の身近な人だけでなく、多くの他人の目も意識せよ！

電車の中で化粧をするくらいなら、スッピンで外に出なさい！電車で馬鹿面をさらすより、スッピンの方がよっぽど潔いぞ！

心にも体にも顔にも自信を持とうではないか！さあ、反論のある女はかかってこい！

…おばばの独り言でありました。

それから男のまゆ毛の手入れもやめてくれ…。



日本事務所より

【ひとりごと】

今号はルワンダ・ブルンジの話題が少なく、日本の出来ごと中心になってしまいました。前のコラムで書いた通り、日本に到着すると、どうも変な場面に出くわすことが多いように思います。でももしかしたらルワンダ生活が長くなってしまった私が変だと感じるだけであって、日本では普通の場面になってしまっているのかもしれない。

ルワンダの大虐殺から19年が経ちました。随分前に起こったことのように思いますが、彼らにとってそれはまだ過去にはなっていません。

虐殺記念館を訪れた女性、静かに泣いています。命を落とした愛しい人を思い出しているのかもしれない。

辛い出来事があったルワンダですが、やはりそこにとどまりたいと思うのは、私にとっても彼らが愛しい存在だからでしょう。

どうしようもなくいい加減なところがある半面、傷ついた自分を、そして他人を癒そうと努力する彼ら。これを応援しないわけにはいきません。

虐殺記念館に書かれている言葉。

"We need to learn about the past, we also need to learn from it."

過去を学ばなくてはならない。そして過去から学ばなくてはならない。

来年は虐殺から20周年になるので、きっといろいろな催しが行われることでしょう。

義手をプレゼントすることができた女性。これからどんな人生を送るのかな？結婚して子供を産んで…、いつか子供を連れて、ワンラブに来てくれたらいいな。

そして自分の手が何故なくなったか、子供に説明する時が来るはず。その時にどうか正義と愛を子供に伝えてください。あの時の痛みと恐怖を、子供たちが味わうことのないように、過去を伝えてください。

ルワンダは子供たちのために、大きく前進しています。

【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？切手に換えたり、現金化して活動に役立てます。

今一度、机の引き出しなど探してみてくださいませ。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

**書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。
ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。**

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信48号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした(11月~2月)。

11月 516,067円

12月 1,065,857円

1月 1,261,670円

2月 238,215円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました(3月31日)。

義足 18本

装具 12本

杖 358本

車いす 2人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【ボランティア健闘中！募集もしています】

1年間ボランティアをしてくれたG君が、日本に戻ってきます。主にレストランの運営を手伝ってもらいました。まだ社会経験がないにもかかわらず、一生懸命がんばってくれました。お疲れさまでした。G君にとってこの1年はどんな年だったのでしょうか。これからますます男らしくなるように、私もルワンダからエールを送り続けたい。

洪水の後、きれいになったレストラン。買い出しや売り上げの管理、スタッフの遅刻に目を光らすなど、やることはたくさんあります。私、ルダシグワ真美に代わって、頭から湯気を出してみませんか？

ルワンダでは引き続き、人材募集中。特にレストラン運営をビジネスとして考える人、大歓迎。また日本的な料理ができる人も探しています。興味のある方は、ぜひ名乗りを上げてくださいませ！

【物資のご支援ありがとうございました。】

引き続き輸送費ご支援のお願い

物資の支援をお願いしておりましたが、ここでひとまず受付を終了させていただきます。ご協力くださった皆さま、本当にありがとうございました。

集まった物資は再度内容をチェックし、種類や数などのリストを作り、ルワンダへ向けて輸送する予定です。

しかしながら現時点でまだ十分な輸送費用が集められておりません。コンテナを輸送するための費用については、引き続き業者などと相談し、適当な方法を検討していきます。

日本からケニアのモンバサ港まで約60万円、ケニアからルワンダまでの陸送費用また通関費用として同額の60万円、合計120万円を想定しています。

皆さま、ぜひコンテナ輸送費のご協力をお願いいたします。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、

すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

ワンラブ通信49号 2013年5月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project